

フランス・ラジオ放送児童合唱団「メトリーズ」 la Maîtrise de la Radiodiffusion française:

— 設立初期（1945-49）の活動内容とその意義について —

田 崎 直 美

1. はじめに

本研究は、フランス第四共和政時代（1946-58年）の芸術文化政策、特に、被占領からの解放直後に確立された唯一の国営ラジオ局である「フランス・ラジオ放送 Radiodiffusion française」（1945-49年）（以下 *RDF* と略記）における音楽政策およびその実際の活動状況を検証する一環である。*RDF* は、ヴィシー政権時代（1940-44年）の「国営ラジオ放送 Radiodiffusion nationale」に修正を施す形で、フランス共和国臨時政府時代（1944.6-1946.10）の情報省管轄の下、国家管理的・中央集権的性格を強く押し出ししながら整備されていった（A.N.: 19870714/14）。本研究では、この *RDF* の音楽番組における合唱上演を保証するために1946年に新設された「フランス・ラジオ放送児童合唱団 la Maîtrise de la Radiodiffusion française」（以下、メトリーズと略記）の初期活動内容とその意義について考察を行なうことを目的とする。

“Maîtrise” とは、「11～14世紀に司教学校から独立した、大規模な教会やコレギアル（参事会教会）に附設された児童合唱団」のことである。“chapelle”, “cappella”, “psalette” と呼ばれる場合もある。フランスとベルギーに最も多くみられたこの組織の起源や歴史については、総じてあまり知られていない。それでも、ここで選抜された児童（男子：筆者註）たちが教会の礼拝全般の職務に従事しながら教育と厳格な規律を身につけていたことは知られている。彼らは変声期後にしばしば大学に送られて教育を受け、その後教会に戻って朝課の聖職者として特権を得ていた。この時代、“Maîtrise” は子供に音楽を教える唯一の場であり、したがって当時の音楽生活における“Maîtrise”の重要性は非常に大きかったとされる。フランス革命によって1791年に廃止され、1795年設立のパリ音楽院 Conservatoire にその立場を譲ることになるが、その後いくつかは復活し、今日まで存続している（VIGNAL 1987: 481; F. L. 1961: 137-138）。

“Maîtrise” 廃止後のフランスでは、復活した少数の“Maîtrise”とは別に、キリスト教の保護のもと形を変えて児童合唱団が誕生した。「木の十字架少年合唱団 les Petits chanteurs à la croix de bois」（パリ、1907年結成）はその有名な例である。実際、第二次世界大戦前の西欧では、多くの児童合唱団がキリスト教の礼拝との結びつきの中で育成されている。存続する世界最古の少年合唱団である「ウィーン少年合唱団 Wiener Sängerknaben」⁽¹⁾ も、今日に至るまで王宮礼拝堂の日曜礼拝には欠かせない存在である（属 1956: 55; 森谷 1998: 54）。

しかし第二次世界大戦後には、別の性格を持つ児童合唱団も誕生する。一つは東欧に成立した社会

主義国家でみられる動きで、礼拝とは関係なく、独特の集団指導体制下で少年合唱団の育成が行われた（丸谷 1979：27）。もう一つは、児童の精神的・経済的救済のための慈善事業として合唱団を設立する動きである。例えば 1950 年に組織された「オーベルンキルヘン児童合唱団 Obernkirchen Children's Choir」（*ibid.*: 29）、またはアメリカの LP 会社の肝煎りにより韓国で結成された「韓国少年合唱」（三浦 1955：108）は、戦争孤児救済が第一目的であった。「世界児童合唱連盟」（本部：パリ）が発足したのも、終戦間際でパリ解放直後の 1944 年である。これはヴァチカンの指示により運営されヴァチカンの資金援助を受けているので、基本的にはキリスト教とその布教活動との結びつきの伝統の一環である。しかし、世界中の子どもたちが合唱を通じ国境を超えた友情で結びあおうという設立趣旨をもつ点が特徴である。この世界児童合唱連盟の第一回世界大会は 1947 年、復興のさなかにあったパリで開催された（丸谷 1979：26）。

フランスの国営ラジオ局にメトリーズが附設されたのは、まさにこうした時期である。ラジオ局が独自の児童合唱団を擁するという形は、当時のヨーロッパではまだ例がなかった。このメトリーズは現在までその基本的な機能を存続させており、ラジオ・フランス Radio France における児童合唱に大きく貢献している⁽²⁾。フランスでは 1950 年代に入ると児童合唱団の新設や復活が多くみられるようになり、音楽活動そのものが新たな傾向を見せ始める⁽³⁾。ことも併せ考えると、メトリーズは第二次世界大戦後の新たな児童合唱の興隆という動きの先駆け、と捉えることができるのである。本研究は、こうしたメトリーズが、どのような状況下で設立され、どのような機会にどのような作品を上演したかを検証することで、この児童合唱団に当時のフランス・ラジオ音楽監督が求めたもの、および戦後フランスで急速に展開したラジオ音楽活動の一面を考察する。なお今回の検証は、フランス公文書館が保管するメトリーズ関連史料（Versement no 20020001）が中心である。活動内容の考察については今回その初動期に限定するため、RDF 時代（1945-49 年）に限定する。

2. 設立の背景と組織の特徴

2.1 設立背景

1946 年 4 月 29 日、RDF 音楽監督バロー（BARRAUD, Henry 1900-97）⁽⁴⁾ とセーヌ県初等教育総監 l'Inspection générale de l'Enseignement primaire de la Seine のダヴィッド（DAVID, Maurice 1891-1974）⁽⁵⁾ により、メトリーズが設立された。創設者バローは、このメトリーズが「ソリストのキャリアをかき立て、ラジオやパリ・オペラ座における合唱を豊かにし、外国公演や商業録音により名声を広める」ことを期待していた（BARRAUD 2010: 407）。

バローはこの設立背景として、既存の合唱団だけではラジオ音楽が要求する合唱上演が困難であったという「大変深刻な問題」（*ibid.*: 105）を挙げている。RDF と契約を結んだ合唱団員は、RDF が毎週日曜日午前 11 時より放送する教育音楽番組（「音楽の喜び Plaisir de la Musique」）を支えている他、週に 3 回のオペラ放送出演、そしてフランス国立放送楽団 Orchestre national de France にて現代曲（しばしば特殊な演奏技術が必要）を取り上げる際の合唱を担当する⁽⁶⁾。しかし、優れた合唱団員の募集が当時困難だったのである。

戦前のフランス国営ラジオ局は、二つの優れた合唱団（Félix Raugel および Yvonne Gouverné 合唱団）⁽⁷⁾ を持っており、合唱付演奏会の全てを担っていた。しかし 1940 年にパリが占領されパリの全てのラジオ局がドイツ当局に支配されると、状況は一変する。1941 年には、エミール・パッサー

ニ (PASSANI, Émile, 1905-74) が設立した合唱団が、ドイツ当局の管理下となった「ラジオ・パリ Radio-Paris」と契約を結ぶ。多くのフランス人合唱団員はこの合唱団のもとに再集結した。1943年3月にヴィシー政権の国営ラジオ局 Radiodiffusion nationale の芸術部門がパリに戻った時でさえ、ほとんどの団員たちはラジオ・パリの高い報酬に惹かれて移籍をしていない。しかしフランス解放後にはこうした団員の「親独的」態度が災いして、1944年10月27日付アレテにて発足した「RDF 粛清委員会 La Commission d'épuration de la RDF」により、多くの合唱団員の職業音楽活動が一定期間禁止されることになる (BARRAUD 2010: 405-406)⁽⁸⁾。その一方で、コンクールにて団員を応募することは、ラジオ局の運営規定が禁止していた。

その上、高い報酬を約束することで団員を確保するという手段も不可能であった。1947年6月25日付の法 loi で、経済改革案が提示される。この案は大幅な経費削減を目的に、6つの地方ラジオ局の閉鎖、地方の常設オーケストラの削除、そして2つあるパリの合唱団のうち一つの削減、を求めた。(RDF) 音楽諮問委員会 le Conseil de la Musique の猛反発によりこれは実現しなかったが、その代わりに合計91名の合唱団員数を80名に減らさざるをえない状況だったのである (ibid.: 406)。この人数はRDF 音楽監督パローにしてみると全く不十分であった⁽⁹⁾。

このような状況を併せ考えると、合唱の規模をなるべく縮小することなく少ない経費でラジオ番組の合唱需要を満たすためには、合唱団員の新規育成が不可欠と考えられた、と推測されるのである。

2.2 組織について

1945年10月、パリ市に特設された小学校 (8, rue Robert-Etienne, RDF 基地局近隣) にてメトリーズの活動が始動する。パリ市の小学校に音楽教育が導入されたのは1828年に遡るが、1945年頃に、パリ市とパリ近郊の小学校の音楽教員数が制度の拡大によって大幅に増加した (吉澤 2008: 139)。特設校の設置はこうした状況と並行して行われたのである。パリとその近郊の小学校児童11,000人の中から2段階選抜を経て、特に優れた声を持つ6歳から14歳までの児童50名 (女子25人、男子25人) がこの学校への入学を許可された⁽¹⁰⁾。ここでの訓練期間を経て、メトリーズは実質的には1946年4月29日にその名を公に掲げることになる。メトリーズの運営・財政全般は、RDFの芸術部門 l'Administration des Services Artistiques が担当した⁽¹¹⁾。

メトリーズでは1951年までに、①準備部 Maitrise préparatoire、②演奏部 Maitrise d'exécution、③女声合唱部 Ensemble Vocal Féminin、④男声合唱部 Ensemble Vocal Masculin という4つのクラスが整備された⁽¹²⁾。最初の「準備部」は、入学試験に合格した子供を受け入れる。最低3カ月の稽古の後、資質が認められれば「演奏部」として契約ができる。契約ができなかった子供は、そのまま通常の学習を継続することになる。「演奏部」は1945年10月に開始された最初のメトリーズ・クラスである。定員は50名で、午前は通常授業が行われ、午後にメトリーズ音楽監督の定める芸術教育プログラム (ソルフェージュ、歌唱、合唱) を受講する。休暇は通常の学校と同じである。男子の場合、変声期後には退部しなければならないが、正規のラジオ局合唱団員に組み入れられる可能性がある他、パリ音楽院 Conservatoire へ推薦されて職業音楽家としての訓練を受ける可能性が用意されていた。変声期後でかつ良い声を持つ18~25歳頃の青年は、メトリーズ「男声部」に所属することができた。日中は (専門) 職業教育に時間を充てることができるように、(声楽) レッスンには20~22時に行われる⁽¹³⁾。一方、15歳になった後も合唱団員を目指して勉強継続の意思がある女子はメトリーズ「女声部」に所属した。メトリーズ総監督 Chef de la Maitrise にはマルセル・クロー

(COURAUD, Marcel, 1912-86) が就任し、主に「演奏部」と「女声部」が関わるすべての演奏会または公開放送にて指揮を執った。さらに、ピエール・キャブドヴィエル (CAPDEVIELLE, Pierre, 1906-69) が訓練監督 Directeur des Études を務め、上記4つのクラスの音楽、音楽全般、合唱の練習プログラムを監修し、教授陣を指導した。

このメトリーズの組織上の特徴の一つは、教会の敷設組織でもなければ音楽専門学校でもない、パリ市特設の普通学校であり、通常授業と音楽教育両方をうける最初の世俗的合唱団である点である⁽¹⁴⁾。もう一つの特徴は、子供の現在または将来における職業的な演奏活動を目的とする点である。「演奏部」は、設立時から存在する *RDF* のラジオ・チャンネルの一つである「ナショナル・チャンネル *Chaîne Nationale*」にて、毎週日曜 9:20~9:35 に定期出演した (1950年頃：筆者註)。出演者には契約した報酬が、メトリーズが管理する児童名義の郵便預金口座に支払われ、児童が16歳になれば自由に使える仕組みになっていた。正規のラジオ局合唱団員ではない「男声部」所属者にも、*RDF* より出演依頼があれば出演して少額ながら出演料を受け取る機会があった。ちなみにウィーン少年合唱団の場合、団員は基本的に無給である上、変声による退団後に職業の斡旋を受けることはない。このメトリーズの仕組みは従来の青少年合唱団の仕組みとは異なることがうかがえる。一方「女声部」(1年契約、更新は2回まで) では、月決めの補償金および放送出演ごとに小額の謝礼が支払われたほか、ラジオ合唱団員に欠員が出れば、正規団員に任命される可能性があった。1951年10月以降、「女声部」は正式な合唱団としてオーケストラと共演で *RDF* に定期出演することになる。

3. 活動内容

3.1 メトリーズによる演奏会

1945年10月に特別校に入学したメトリーズの団員たちは、訓練の成果として、学年末の1946年6月6日にシャンゼリゼ劇場で最初の公開演奏会に出演する。これは一般聴衆に対するメトリーズ披露会であると同時に、団員にとって実質的な最初の活動であった。彼らの演奏曲目は、ミヒヤエル・ハイドン (HAYDN, Johann Michael, 1737-1806) (ヨーゼフ・ハイドンの弟：筆者註) 作曲《ミサ曲》、ジャンヌカン (JANNEQUIN, Clément, c.1480-1558) 作曲《鳥の歌》、そしてピエルネ (PIERNÉ, Gabriel, 1863-1937) 作曲のオラトリオ《ベツレヘムの子どもたち》(1907) であった。これを皮切りに、合唱団はシーズンごとにプログラムを設定して公開演奏会に出演するようになる (詳細は【表1】参照)。

最初の1946-47年シーズンには、文部省後援 (1946年11月) や「ラジオ放送の闘士たちのための演奏会」(1947年3月) など、政府や *RDF* 関係組織の支援のもとに開かれる演奏会が多い。*RDF* が情報省管轄下にあるフランス国内唯一の国営放送局であり、メトリーズはその附設機関であるという性質から、こうした支援があったと推測される。プログラムの詳細は不明だが、おそらく活動の中心は、*RDF* 音楽監督でメトリーズ提唱者である作曲家アンリ・バロー作曲のオラトリオ《聖なる幼児たちの秘儀》(1947) の初演であったと推測される。これは、1947年5月8日に一般向け演奏会として披露された。翌1947-48年シーズンの主な行事は、1948年4月にスイスのベルンにて開催された国際合唱コンクール参加であったと考えられる。プログラムの核となった作品は、アンドレ・カブレ (CAPLET, André, 1878-1925) 作曲《サン=テュスタシュ=ラ=フォレの児童合唱によるミサ曲》(1922) である。1948-49年シーズンには公開演奏会の記録がないが、翌1950-51年シーズンからは

表1 メトリーズによる演奏会（1945-49年シーズン）

日時	場所	演奏曲目（作曲者）	備考
1946年 6月6日	Théâtre des Champ-Élysée	«ミサ曲 Messe» (Michel Haydn) «鳥の歌 Le chant des oiseaux» (Clément Jannequin) «ベツレヘムの子どもたち Les enfants à Bethléem» (Gabriel Pierné)	Marcel COURAUD 指揮 l'Orchestre National (Manuel Rosenthal 指揮)
1946年 7月12日	Palais de Chaillot		la Fédération des oeuvres laïques による演奏会
1946年 11月	Sorbonne		sous le patronage de M. le Ministre de l'Education Nationale
1946年 12月15日	salle Pleyel		
1946年 12月16日	Palais de la Mutualité		
1947年 3月23日	Salle Pleyel		au profit des Combattants de la Radiodiffusion
1947年 5月8日	Théâtre des Champ-Élysée	«聖なる幼児たちの秘儀 Le Mystère des Saints Innocents» (Henry Barraud)	concert public/l'Orchestre National 共演
1947年 12月20日		ミサ曲 «Des petits chanteurs de Saint-Eustache La Forêt» (André Caplet)	
1948年 4月 24, 25日		ミサ曲 «Des petits chanteurs de Saint-Eustache La Forêt» (André Caplet) «よい声で En bonne voix» (Florent Schmitt)	Grand concours interna- tional de chant à BERNE
1948年 6月			一般向け演奏会 concert public/l'Orchestre National 共演

演奏会活動が一気に活発化し、多くのレパートリーを開拓していくことになる。

上述の通り、発足から数年間のプログラムの特徴は、フランス人作曲家による 20 世紀のオラトリオまたはミサ曲で、しかも曲名に「こども enfant」「幼児 innocent」「児童 petit (chanteur)」という言葉がつく作品が中心となっている点である。初回演奏会ではこの他、16 世紀フランスの有名なシャンソン（「鳥の歌」）や、忘却の途にあったオーストリアの古典派作曲家（ミヒャエル・ハイドン）のミサ曲といった、国籍（仏と奥）、聖俗、知名度の点で対照的な作品が選ばれていることが指摘できる。

それでは、このメトリーズによる演奏会を、聴衆はどのように受け止めたのであろうか。ここでは残された新聞評をもとに、音楽批評家たちの言説から読み取ることのできる観点について考察する。

最初の演奏会（1946年6月6日）に対して、新聞各紙は音楽批評欄にて一斉に、メトリーズの演奏の質の高さを絶賛した。それは「素晴らしく一糸乱れぬ声で、よく習得された確かなテクニックを持っている」⁽¹⁵⁾、「言葉に表せないほどの、異なる様式の作品群に対する高い完成度」⁽¹⁶⁾、「〈ウィーン少年合唱団〉や〈木の十字架少年合唱団〉にひけを取らない合唱団の設立」⁽¹⁷⁾ という言説からうかがい知ることができる。最も高い評価を受けたのは、演奏した三曲の中でもジャヌカン作曲「鳥の歌」であった。それは、フランス・ルネサンスのア・カベラ作品としての演奏が「清潔で正確だけでなく、深みや音色が素晴らしい」⁽¹⁸⁾、「400 年前に作曲されたにもかかわらず新鮮さと若さを保っている」⁽¹⁹⁾、と評価された点に表れている。

最も注目すべき点は、多くの新聞評がメトリーズの成果を「優れた教育の賜物」と評価している点である。「我々はフランスの子どもたち、明らかに厳選されてはいるが普通の小学生たちを、素晴らしい音楽家かつ優秀な合唱団員に変身させることができるのである。」⁽²⁰⁾ 複数の新聞評は、このメトリーズが「世俗の laïque」普通学校であること、そして学業も他の普通校に比べて遅れているどころか1年先を進んでいるという優秀さ、を強調している⁽²¹⁾。

メトリーズ初回演奏会批評の中には、明白に愛国主義的観点からのフランス文化プロパガンダとして書かれたものもあった。音楽家であるジャン・ヴィエネル (WIENER, Jean, 1896-1982) は、普通の児童が職業音楽家として高い質を示したことについて、フランス文化 (音楽) の将来に期待する記事を寄せている。「ご承知の通り、あらゆることは悪い方向に進んでおり、人々の生活はかつてないほど苦しくなっている。知性は後退している。(中略)しかし、時折喜びの時や希望をもつことのできる時がある。(中略)信じ難く、衝撃的な、喜ばしく、不安にさせられるような、奮い立たされるような、ほとんど奇跡のようなものが存在する。「フランス・ラジオ局メトリーズ」が存在するのだ。次のことを強調し繰り返さねばならない。これは音楽のためになされたことなのである、(中略)なぜなら、(中略)我らの国は他のいたるところと同様に音楽に恵まれているからである。」⁽²²⁾ また別の記事では、メトリーズの演奏を聴いて、「ヨーロッパ音楽発祥の地であるこの国では、その文化遺産が長い間ドイツのクラシック音楽の排他的崇拜に取りつかれてきたが、まだおずおずとではあるものの不当な忘却から抜け出そうとしている」⁽²³⁾ と評している。

3.2 その他の活動⁽²⁴⁾

① 録音

1948年4月にベルン国際合唱コンクールに参加した2か月後の1948年6月、メトリーズは、アンリ・ソゲ (SAUGUET, Henri 1901-89) 作曲《季節 Les saisons》(1949出版)⁽²⁵⁾を初演、録音している。翌シーズン(1948-49年)は、公開演奏会の記録が残されていない代わりに、1949年6月ソゲ作曲でオペラ=コミック座のレパートリーである《パルムの僧院 La Chartreuse de Parme》(A. Lunel 台本, 1927-36)に出演、録音を行なっている。その他、正確な時期は不明であるが、1950年までにラヴェル (RAVEL, Maurice 1875-1937) 作曲《子供と魔法 L'enfant et les Sortilèges》(1919-25)、メトリーズが初演したバロー作曲《聖なる幼児たちの秘儀》(1947)、そして《クリスマス聖歌集 Noël》(l'UNESCO, la B. B. C., l'Amérique, Vienne)を録音している。

② 映画 (ソノリゼーション)

メトリーズの活動は、フランス映画におけるソノリゼーション (音付け) にも及んでいる。日付は不詳であるが、1950年までに、オータン=ララ (AUTANT-LALA, Claude 1901-2000) 監督《肉体の悪魔 Le diable au corps》(ラディゲの小説に基づく、1947年製作)、マルセル・レルビエ (L'HERBIER, Marcel 1888-1979) 監督《反逆者 La Révoltée》(1948年製作)、ジャン・イマージュ (IMAGE, Jean (芸名) 1910-89) によるフランス・アニメーション映画《勇敢なジャンノ君 Jeannot l'intrépide》(1950年製作) 他、数作品に出演したことが記録されている。

③ 音楽祭

1950年からは、メトリーズの新たな活動局面が開始する。国内外の音楽祭への積極的な参加はそ

の一つである。本稿では紹介に留めるが、1950-51年に参加した音楽祭にはボルドー国際音楽祭、SCEAUX 音楽祭、クラマール音楽祭、ザルツブルグ国際音楽オリンピックが挙げられる。

④ 新作初演

メトリーズが最初に行なった新作初演は、前述したバロー作曲《聖なる幼児たちの秘儀》(1947)である。そして1952年からは毎年、メトリーズのために特別に作曲された作品が出現する⁽²⁶⁾。

⑤ ラジオ番組放送

メトリーズは最初、正規のラジオ合唱団員養成機関であると同時に、ラジオ放送音楽で必要とされた時に出演する、演奏の補助組織として活動していた。しかし1950年代からは、定期的なラジオ放送番組の一つに「メトリーズ音楽会 Concert de la Maîtrise de la radiodiffusion」(10月から12月まで12回放送)が設けられ、独立した演奏母体として積極的に活動することになる。放送出演時間帯は、1953年にはパリ・チャンネル Chaine Parisienne にて毎週木曜日 16:30~16:45、1954年にはパリ・アンテル Paris-Inter にて毎週日曜日 10:00~10:15、1956年からはナショナル・チャンネルに移り毎週日曜日 17:15~17:30、であった。

4. メトリーズに求められたもの

4.1 バローの音楽観

それでは、こうしたメトリーズの活動はどのような理念に支えられていたのであろうか。今回検証している時期(1945-49)は、その後と比べてRDF各監督の自律性が高かった時期と考えられている(ECK 1997: 594)。ここではRDF音楽監督で、かつメトリーズ新設に尽力したアンリ・バローの音楽観とその反映の有無について検討する⁽²⁷⁾。

1945年7月11日の音楽系公式記者会見で彼は、ドイツ占領下での体系的政策およびそれ以前の無意識的な政策により多くのフランス人聴衆の関心が19世紀音楽(ロマン主義時代、特にドイツ・ロマン主義)にしか向かなくなかったことを指摘している。その上で、彼はドイツ・ロマン主義音楽に偏ったレパートリーからの脱却を目標に掲げたのである⁽²⁸⁾。ECKはこのバローの標榜した「脱ドイツ音楽」に関して、占領下フランスにて(ドイツ当局支配下の)ラジオ・パリがドイツ・ロマン主義音楽をプロパガンダの手段として使いすぎたことへの反動、あるいは「無毒化 désintoxication」であると解釈している(ECK 1997: 114)。

バローはドイツ・ロマン主義音楽に浸りきっている聴衆の改革手段の一つとして、RDFの重要な演奏団体の一つであるフランス国立放送楽団の活動拠点をシャンゼリゼ劇場 le Théâtre des Champs-Élyséesに定めた上で、そこでの演奏会は入場無料とした。聴衆に入場料を気にせずに演奏会に足を運んでもらうことで、新たなレパートリーを認めてもらうことが目的だった(BARRAUD 2010: 405)。

バローが新たなレパートリーとして強く提言したものは、18世紀半ばまでに作曲されたフランス音楽であった。彼は上記記者会見にて、(ドイツ音楽が興隆する)19世紀以前には、イタリアおよびフランスにて音楽が繁栄したのであり、その事実をフランス人聴衆は知るべきである、と主張している。作曲家としても強烈な個性や斬新さを打ち出すことより伝統の継承を重視する立場であったバロー

は、フランス音楽の過去の栄光を強調することで今日の芸術音楽レパートリーを刷新すべきだという見解を主張したのである⁽²⁹⁾。

その一方で、ドイツ音楽ではない現代音楽の上演にも力を入れていた。バローがフランス国立放送楽団 1944-45 年シーズン演目に、占領下ではドイツ当局の圧力のもとで上演できなかったストラヴィンスキー (STRAVINSKY, Igor, 1882-1971) の全作品を組み入れたことはその例である (ECK 1997: 114)。バローは新作初演も重要視していた。彼は 1947 年のラジオ雑誌の記事の中で、作品の初演と再演はラジオの役割として期待されていることの一つであり、この点を尊重してはじめて、制作/上演の形にせよ単に聴くという形にせよ、音楽に関わろうとする者たちをラジオが教育する役割を持つ、と述べている (BARRAUD 1947: 27-28)。

初期メトリーズのレパートリーをみると、その中心となったのは 20 世紀フランス人作曲家のオラトリオもしくはミサ曲である。1949 年までに演奏会と録音で 5 作品を上演し、うち 2 作品は新作初演であった。18 世紀以前のフランス音楽のレパートリーはまだ少なく、記録では「鳥の歌」だけである。ドイツ音楽に関しても、ロマン派以前の作曲家 (ミヒャエル・ハイドン) を上演したのみである。1950 年代以降にはメトリーズのレパートリーが上記全ての視点から飛躍的に増大する⁽³⁰⁾ が、最初期では合唱教育の導入として 20 世紀フランス音楽が採用されたことがうかがえる。

4.2 児童の声の扱い方：初期メトリーズが上演した現代音楽 2 作品より

それでは、実際に「児童合唱」にはどのような要素が要求されたのであろうか。ここでは当時メトリーズが上演した 20 世紀フランス音楽に焦点を当てる。特に、メトリーズが最初の演奏会 (1946 年 6 月 6 日) で上演した「ベツレヘムの子どもたち」と、その翌年 (1947 年 5 月 8 日) に初演した「聖なる幼児たちの秘儀」を取り上げた上で、音楽様式上の特徴と児童の声の扱い方との関係について考察を行う⁽³¹⁾。

① 「ベツレヘムの子どもたち」(ピエルネ作曲)

この作品は 1907 年に作曲され、同年 4 月 13 日に Koninklyke Oratorium Vereeniging (アムステルダム) により初演された。キリスト生誕の典礼オラトリオ、もしくは「神秘劇」で、「若き信仰心のほとばしりに酔いしれた子供たち」(A. N.: 20020001/59) を主題としている。

第 1 幕は、村の平原である。オーケストラによる前奏の後、民謡風の旋律⁽³²⁾ で羊飼いの子供たちの声として児童合唱が始まる (【譜例 1】)。音楽つき朗読を挟みながら話は進行する。彼らはイエスの誕生に立ち会うために暗い夜道を (【譜例 2】) 星の声に導かれながら進む。第 2 幕は、幼子イエスが眠る厩。聖母は優しく彼を見守っている。そこへ訪れた子供たちは、讚美歌風の主題 (【譜例 3】) と、子守歌風の主題 (【譜例 4】) を歌う。短いオーケストラ間奏と朗読の後、キリストの誕生を喜ぶ合唱で幕を閉じる。

【譜例 1】「ベツレヘムの子どもたち」第 1 幕：踊りの主題 (児童合唱旋律)



【譜例 2】《ベツレヘムの子どもたち》第 1 幕：夜道の主題（児童合唱旋律）



【譜例 3】《ベツレヘムの子どもたち》第 2 幕：出会いの主題（児童合唱旋律）



【譜例 4】《ベツレヘムの子どもたち》第 2 幕：子守歌の主題（児童合唱旋律）



この作品での大きな特徴は、演奏時間約 55 分を通して、児童合唱がほとんど切れ目なく登場する点である。作曲者ピエルネは、歌唱教育に非常に高い関心を持っており、学校で普通の歌唱訓練を受けた子供たちの若々しい声は大規模作品上演に耐えうると考えていた（A. N.: 20020001/59）。ラジオ放送番組でのメトリーズ演奏会の司会者ポール・ル＝フレム（LE FLEM, Paul 1881-1984）は、この音楽では上演を困難にさせる束縛がすべて取り払われている、旋律はしばしばディスカントゥスを伴う 5 度音程で中世の佳き時代を思わせる、と語っている。音楽による対話部分にも、重々しいポリフォニーはない。素朴で歌いやすい旋律を児童は担当し、一種の初々しさを表現しているのである。

② 《聖なる幼児たちの秘儀》（パロー作曲）

一方この作品は、先の作品と舞台を同じくしつつも、ベツレヘムの幼児大虐殺⁽³³⁾を主題とする。第一次世界大戦中ヴィルロワでドイツ軍との交戦中に戦死した詩人シャルル・ペギー（PÉGUY, Charles 1873-1914）の詩に基づく。パローはこの作品を、フランス解放直前にボルドーでドイツ軍により射殺された兄（または弟）のジャンに捧げている⁽³⁴⁾。全演奏時間は約 25 分だが、5 部構成になっており、児童合唱は第 5 部から加わる。

第 1 部は、緩やかな男声合唱のホモフォニー（ア・カペラ）で開始、いつの世にも人類に残された希望の可能性を歌う。第 2 部〔神聖な幻影の場面〕ではオーケストラと女声合唱が加わり、ポリフォニーを形成する。第 3 部〔祈りの場面〕で声部のテクスチュアの厚みを徐々に増していくが、第 4 部に入ると一転して緩やかなバリトン・ソロとなり、混声合唱がそれに続く。第 5 部に入ると突如、音楽は静止し、朗読が始まる（“ああ、息子よ … Hélas! mon fils ….”）。続いて、オーケストラによる低音のホモフォニーが、朗唱風に始まる。そこへ児童合唱が参入する（“おお夕べよ、おお夜よ … Ô, soir, Ô, nuit, ….”）。男声合唱、次いで女声合唱が加わり、厚みのあるポリフォニーへと発展する。オーケストラのみによる短い間奏ののち、男声合唱が再現するが、ここからはテンポが速くなり、金管楽器による不気味な不協和音、不安定なリズム、急速な音の上行、下行が始まる。「聖なる幼児たちの虐殺」の場面である。児童合唱が再び登場するのは、まさにこの中である。児童合唱パートの旋律は、男声合唱による低音部の支えの上で、高音域を不安定に上下行する。一瞬静まった後、第 5 部の開始部を回想するような、低音部による朗唱が再び始まる。この上に児童合唱が再び加わり、徐々にテクスチュアの厚みとデュナーミクを増しながら、壮大なコラールが形成される。オーケストラのみの短

い後奏と朗読の後、男声合唱と女声合唱が浄化された静寂を表現、幕となる。

ここでの音楽様式は当時、ベルリオーズ、リスト、オネゲルの大オラトリオの伝統の延長⁽³⁵⁾、または独唱と合唱がJ. S. バッハのカンタータと同じ役割⁽³⁶⁾として語られた。また、しばしば中世風な、また宗教的な様式のポリフォニーであることの指摘や⁽³⁷⁾、歌手たちに劇的なデクラメーションを要求する中で、グレゴリオ聖歌やカンティレーナ（中世の世俗曲）の活発なリズムを自由な曲調で借用することで無理なく旋律的表現をさせる場面もある、とする評価もあった⁽³⁸⁾。

この作品における児童合唱は、登場場面の内容と照らし合わせて、いわゆる「素朴さ」「愛らしさ」とは無関係である。虐殺という残酷で悲惨な場面のなかで、殉教者のもつ、あるいは世界に残されている目には見えない純粹さ、崇高さを、児童合唱は表現していると考えられる。声部の音楽書法をみても、先の作品とは対照的である。部分的に中世風ではあっても、旋法とも機能合声とも異なる響き、および緩やかながらも不規則なリズムで書かれている。ここにおいて児童合唱は、複雑な響きとリズムを正確にとらえる高度な訓練を経る必要があるのである。

5. 結 語

メトリーズは、戦後直後のラジオ放送音楽を支える優秀な合唱団員の継続的な確保のためにRDF音楽監督のバローの尽力により設立された。なぜ彼は児童合唱団に「メトリーズ」という言葉を採用したのか。本稿での検討の結果、ここでの児童合唱団員の訓練のあり方は、場所が教会ではなく普通校であること、寄宿制ではなく通学制であること、男子だけでなく女子も選抜されることを除いては、実はかつての“Maitrise”のあり方に類似していることが分かった。特に、公的機関にて選抜された児童へのエリート教育により実践で役立つ優秀な人材かつ音楽家を育成する、というコンセプトは、そのまま引き継がれているのである。バローの理念によると、戦後フランスにて推奨されるべき音楽とは、ドイツ・ロマン派音楽（具体的にはヴェーグナーを指すと思われる）より前の時代のフランス音楽であった。こうした考えにより、ルネサンス時代もしくは中世の音楽がおのずと注目されることになったと推察される。中世に誕生し18世紀末までフランス各地の音楽生活を支えた組織の一つである“Maitrise”は彼にとっては文化的郷愁をそそるものであり、彼はこの現代版としての「メトリーズ」を戦後フランス音楽界の刷新の原動力としたかったのではないだろうか。実際、教育の力でフランスの子どもを優秀な音楽家にすることが今後のフランス文化の発展およびそれに伴う国民の誇りと希望につながるという考えが、メトリーズ最初の演奏会（1946年6月6日）の諸批評の中で表明されたのである。これらは、なぜバローが合唱団員の確保、願わくは増員に固執したのか、という問いにも関連するであろう。すなわち、フランス文化を音楽分野から発展させるには、質の向上はもちろんのこと「数」の力でも飛躍する必要があると思われるのである。

初期メトリーズのレパトリーはまだ少ないが、20世紀フランス音楽が柱となっていた。そこで音楽様式は決して前衛的ではなく、むしろしばしば中世風と評価される懐古趣味的な要素を持っている。ここにも、18世紀以前の音楽の見直しによるフランス文化再生という理念が反映されているといえよう。ただし、過度な排他性はみられない。そして、児童合唱に要求された音楽の性格は広範囲であった。歌いやすい旋律でいわゆる「子どもらしい」素朴さやあどけなさを表現することから、高度な訓練を要するパートを担当して、オーケストラや大人の合唱とともに精神的に深遠な世界を表現することも当時すでに要求されていた。メトリーズは名実ともに「音楽家」の養成機関であったの

である。

設立からほどなくして、男声が集まらず「ほとんど女声ばかりになってしまった」(BARRAUD 2010: 407) メトリーズではあるが、1950年代からはラジオ放送をはじめ多方面にて飛躍的な活動を展開することになる。これはおそらく、初期の活動及び人材育成が広く認められた結果と考えられる。1950年からは、ラジオ局の各監督の自律性が弱められて国策がより直接的にラジオ・プログラムに関与することになる(ECK 1997: 594)。メトリーズのその後の発展についての検証は、今後の課題である。

付 記

本研究は、平成23年度科学研究費補助金(若手研究(B)) [研究課題番号: 21720047]、および住友生命第2回「女性研究者への支援」による研究成果の一部である。

註

- (1) この合唱団の前身は、1498年7月20日にハプスブルク家第9代皇帝マクシミリアン1世の命により組織的に設立された、王宮専属の宮廷楽団 Hofmusikkapelle の一部である。ヨーロッパの宮廷で最も早く創立されたこの宮廷楽団は50人の音楽家で構成され、少年合唱団、二人のバス歌手、オーケストラを擁していた。1919年に皇帝が廃されて共和国が成立した後の1924年以降は、他所から経済的援助を受けない、自主管理の独立した私立団体として活動している(森谷1998: 52-53, 55; 藁科1985: 300; 丸山1979: 28)。
- (2) 現在の活動については、ABRAMOWITZ 2005の“*la Maitrise de Radio France*”の項目を参照。
- (3) この点についてCHIMÈNESは、同時期にPetits Chanteurs de Versailles (Jacques Duvalを指揮者として1951年に設立されたPetits Chanteurs de Saint-François de Versaillesの前身)の設立や、Petits Chanteurs de Saint-Croix de Neuillyの復活(1956)を挙げている(BARRAUD 2010: 407)。
- (4) 作曲家バローは音楽協会le Triton(1933年設立)のメンバーで、1937年万国博覧会での音楽部門責任者を務めた後、当時の国営ラジオ局Radio Parisにmusicien metteur en ondesとして入る。休戦協定後にマルセイユのラジオ局に携わり、音楽部門で働く。レジスタンス組織であるle Front national des musiciensのメンバーとして、ラジオ放送音楽部門の組織を準備していた(ECK 1997: 601-602)。
- (5) 彼はヴィシー政権時(1940-44)にレジスタンスとして行動していた。1940年l'Académie d'Algerの副院長であった時には、ユダヤ人教師を罷免することを拒否した上、モンペリエのinspecteur d'Académieに任命された時にはレジスタンス運動に加わっていた。フランス解放時に、directeur des Services d'Enseignement primaire de la Seineに任命され、ついで文部省長官 inspecteur général de l'Éducation nationaleに任命される(BARRAUD 2010: 407)。
- (6) PORCHÉ, Wladimir, “Conférence de presse” (1947年7月3日) (A. N.: 19870714/14)。
- (7) Félix Raugelの指揮する合唱団は、団員42名、ラジオでは1934-47に活躍、Yvonne Gouverné指揮する合唱団は団員40名、ラジオでは1935-60に活躍した。この二つの合唱団の立場は両義的で、戦前は正式にラジオに付属していたわけではない。占領後、Gouvernéは合唱団とともにパリに残り、Raugelは1941年にフランス国立放送楽団とともにマルセイユに再集結した(BARRAUD 2010: 405-406)。
- (8) ラジオ・パリに協力したフランス人音楽家は、この粛清委員会にて、支払われた出演料一回につき15日間の出演禁止に科される。(例えば4年間で20回放送出演した人は、10ヶ月間音楽家としての職業を認められない。)この計算により、何百人ものアーティスト(音楽家、コメディアン、シャンソン歌手など)がフランスのラジオ放送で禁止された。パリでは少なくともほとんどの音楽家がこれに当てはまるため、バローは一流の音楽家の多くを2年間は出演禁止とせざるを得なかった(*ibid.*: 401)。
- (9) ちなみに彼は1945年にも、合唱団員数を104人から140人に増員する案を財務省に提出するが、却下されている(*L'Union Internationale de Radiodiffusion*, 236号(1945年9月), 294)。

- (10) LAURENT, Lucien, “Voici les 50 rossignols de la radio,” *Quatre et Vrais* (1946年7月25日) (A. N.: 20020001/87).
- (11) DUMAS, Hubert, “La Maîtrise de la Radiodiffusion française”, 4-5. (A. N.: 20020001/60).
- (12) *ibid.* 2-3.
- (13) このシステムは、ウィーン少年合唱団のムタンテン・ハイム（声変わりの家）（藁科 1985：291）に類似するが、引き続き声楽レッスンを受けることができる点が異なっている。
- (14) 例えばウィーン少年合唱団はカトリックにおける礼拝音楽との結びつきを起源にもつ。
- (15) BOYE, Noël, “La Maîtrise de la Radiodiffusion nationale,” *France Soir* (1946年6月8日) (A. N.: 20020001/87).
- (16) DUMESNIL, René, “Musique,” *Le Monde* (1946年6月11日) (*ibid.*).
- (17) s. n. “LA MAITRISE de la radiodiffusion,” *Une semaine dans le monde* (1946年6月15日) (*ibid.*).
- (18) BRILLANT, Maurice, “Les petits chanteurs de la radiodiffusion” *L'Époque* (1946年6月1日) (*ibid.*). 演奏会前の練習風景の取材記事である。
- (19) BOYE 1946（上掲）。
- (20) CHARPENTIER, Raymond, “Les petits chanteurs à la radio,” *Arts* (1946年6月14日) (*ibid.*).
- (21) L. ALGAZI, “La maîtrise de la radio,” *La Marseillaise* (1946年6月13日); CHARPENTIER 1946（上掲）; MAURICE-AMOUR, Lila, “Renaissance du Chant Choral”, *Opéra* (1946年10月23日) (*ibid.*).
- (22) WIENER, Jean “Une raison d’espérer... la chorale de la radiodiffusion française,” *France Soir* (1946年6月22日) (*ibid.*).
- (23) s. n. “LA MAITRISE de la radiodiffusion,” *Une semaine dans le monde* (1946年6月15日)（上掲）。
- (24) この章における情報は、A. N.: 20020001/59, 60 の史料に基づく。
- (25) この作品は、ソゲ作曲交響曲第二番（「アレゴリー風交響曲 symphonie allégorique」）を児童合唱用に編曲した作品であると思われる。
- (26) 1952年以降で記録に残された最初の新作は、マルセル・ランドフスキ（LANDOWSKI, Marcel 1915-99）作曲「幼児の4つの唄 Quatre chants d’Innocence」である。1952年12月15日に公開演奏にて初演され、ナショナル・チャンネルにて中継放送された。
- (27) RDF 音楽監督が打ち出すメトリーズの活動理念は、現場の合唱指導者の理念や方針とどのように関係していたのか。この点については A. N.: 20020001/7 (Personnel enseignant et administratif), A. N.: 20020001/8 (Dossiers de personnel des enseignants de la Maîtrise) に有益な情報があると思われる。しかし筆者の調査時（2011年8月）には、これらの史料はまだ閲覧可能な状態ではなかったため、今回の考察には含めていない。
- (28) BARRAUD, Henry, “Une année d’activité musicale à la Radio française”, *L’Union Internationale de Radiodiffusion*, 236号 (1945年9月), 257. (A. N.: F43/162); TAZAKI 2011: 106.
- (29) RDF 下部組織の一つであるクラブ・デッセイにおける演奏会（1946-47年）には、こうしたバロアの発言がプログラムに忠実に反映させたと思われる（CLANCIER 2002: 65; TAZAKI 2011: 106）。
- (30) ジャヌカンの他にリュリ、ラモー、パーセル、ラッス、ビクトリア等の作品が加わる。ドイツ音楽も、バッハ、ヘンデル、モーツァルトの他、ロマン派とされる作曲家であるシューベルト、メンデルスゾーン、シューマンの作品も加わっている。もっとも「ドイツの作曲家による作品の中で少年合唱が起用されているものは、決して多いとは言えない。」（井上 2011: 103）という指摘も考慮する必要がある。
- (31) 国立視聴覚研究所（INA）にこの2作品のラジオ放送資料が残されている。
- (32) 楽譜には注意書として、「児童の歌はシャンソン・ポピュラーに着想を得ているが、いかなる曲集からも援用されていない」とある（PIERNÉ 1907: 7）。
- (33) キリスト降誕を知らされたユダヤのヘロデ王による、2歳以下の男児の殺害（マタイ福音書 2: 16-18）。
- (34) SAUGUET, Henri, “La Musique: nouveautés du jour et de demain”, *La Bataille* (1947年5月14日) (A. N.: 20020001/59).
- (35) *ibid.*

フランス・ラジオ放送児童合唱団「メトリーズ」 la Maîtrise de la Radiodiffusion française

- (36) BOULANGER, Nadia, “Les grands concerts”, *Spectateur* (1947年5月27日) (*ibid.*).
(37) SAUGUET 1947 (上掲).
(38) “La musique: Le mystère des Saints-Innocents”, *La Marseillaise* (1947年5月15日) (*ibid.*).

引用文献

[Archives nationales (A. N.)] (フランス国立公文書館)

- 20020001/59: Répertoire musical de la Maîtrise
20020001/60: Saison musicale: organisation des tournées, concerts et enregistrements (1945-2000).
20020001/87: Revues de presse: articles de presse (1945-1986).
19870714/14: Organisation administrative et technique de la Radiodiffusion Télévision Française: (1945-1960).
F43/162-163: *L'Union Internationale de Radiodiffusion. Bulletin mensuel* no. 221-251 (1944年6月-1946年12月).
BARRAUD, Henri, 1947 “La radio et ses prétendants: Enquête”, s. n., *La Chambre d'Écho*, Paris: Cahiers du Club d'Essai de la Radiodiffusion française, 27-29.

[研究文献]

- ABRAMOWITZ, Christophe, 2005, *Appassionato: La passion de la musique à Radio France*, Jacob-Duvernet.
BARRAUD, Henry, 2010, *Un compositeur aux commandes de la Radio: Essai autobiographique*, CHIMÈNES, Myriam; LE BAIL, Karine (éds.), Paris: Fayard/ Bibliothèque nationale de France.
CLANCIER, Eliane, 2002, *Le Club d'Essai de la Radiodiffusion française (1946-1960)*, Université de Paris I Panthéon-Sorbonne (mémoire).
ECK, Héléne, 1997, *La radiodiffusion sous la Quatrième République: monopole et service public, août 1944-décembre 1953*, Thèse, Université de Paris XII.
F. L. 1961, *Encyclopédie de la musique*, tome III, 137-138, Paris: Fasquelle.
井上博子, 2011, 「ドイツ音楽における少年合唱: «マタイ受難曲», «パルジファル», «カルミナ・ブラーナ」を事例として」『熊本大学社会文化研究』第9号, 103-120.
丸谷吉清, 1979, 「わが国の少年少女合唱運動について」『四天王寺女子大学紀要』第12号, 24-38.
三浦宙一 (談), 1955, 「世界の少年合唱団: 特集 6」『音楽教育』第10巻, 第6号, 108-109.
森谷眞理子, 1998, 「WIEN 便り(4) シューベルトからウィーン少年合唱団へ」『赤いはりねずみ』第28号, 49-56.
属啓成, 1956, 「ウィーンの少年合唱団について」『フィルハーモニー』第28巻, 第1号, 54-55.
薬科れい, 1985, 「ウィーン少年合唱団の栄光と挫折」『潮』第320号, 288-304.
田崎直美, 2011, 「フランスの戦後復興期における芸術音楽の役割: フランス・ラジオ局 (Radiodiffusion Française (1945-49年)) の音楽政策の検証より」『人文科学研究』(お茶の水女子大学), 第7号, 99-111.
VIGNAL, Marc (dir.), 1987, *Dictionnaire de la Musique*, Paris: Librairie Larousse.
吉澤恭子, 2008, 「パリの市の小学校音楽教員採用・養成制度 (1948-1965) — 採用方針と準備科の取り組み」『日仏教育学会年報』vol. 15, 139-148.

[視聴覚資料]

[L'Institut national de audiovisuel (INA)] (国立視聴覚研究所)

- BARRAUD, Henry, *Le mystère des Saints Innocents*, Orchestre national de France, ROSENTHAL, Manuel (dir.), (1957年12月18日録音).
PIERNÉ, Gabriel, *Les Enfants à Bethléem*, Canadian Broadcasting Corporation (1946年12月24日録音).

[楽譜資料]

BARRAUD, Henry, 1950, *Le mystère des Saints Innocents*, Éditions françaises de France.

PIERNÉ, Gabriel, 1907, *Les Enfants à Bethléem: Mystère en deux parties pour soli, chœur d'enfants et orchestre*, Paris: Heugel [H. et Cie 24171].